

檜隈寺周辺の調査

―第180次

調査の概要 本調査はキトラ古墳周辺に計画された国営飛鳥歴史公園の整備にともなう発掘調査である。調査は国土交通省の委託を受け、2008年度から実施しているもので、今年度はその7ヵ年目にあたる。調査区は、丘陵斜面部（A区）と丘陵上の金堂南東（B区）に設定した。

A区は、檜隈寺の回廊東南隅に南接し、檜隈寺の伽藍配置の一端を解明する目的で設けた。B区は、金堂南面の未調査区で、塔の東西中軸線の南方に設けた。この中軸線上では、塔の南方およそ100mの位置で、平安時代後期の幢竿支柱と推定される柱穴SX950が発見されている¹⁾。檜隈寺では、平安時代後期に塔跡に十三重石塔が建立され、講堂基壇の改修がおこなわれていることから、建立当初だけではなく古代末～中世における檜隈寺の実態を知る手がかりを得ることも目指した。

調査は2014年1月9日から開始し、3月17日に終了した。調査面積はA区195㎡、B区100㎡、合計295㎡である。詳細は次年度の紀要において報告することとし、以下に

その成果の要点を述べる。

調査の成果 斜面部のA区は、現代まで棚田として利用されていたため相応の地形改変を受けてはいるが、丘陵中腹の比較的平坦な面において、地山上面で一辺70～90cmをはかる隅丸方形の柱穴からなる掘立柱建物・掘立柱南北塀を検出した（図Ⅱ-58）。これらの建物方位は檜隈寺伽藍の振れに概ね一致する。塀は南北の調査区外に延び、その南延長部分の柱穴1基が4次調査（1982年）で検出されている。

B区では小型の柱穴からなる掘立柱建物3棟と、土坑の周囲に石を配置した大型の遺構等を検出した。これらはいずれも平安時代末～中世に降る遺構であり、この時期における檜隈寺の利用に新たな知見を追加するものである。なお、B区では古代の遺構はほとんどみられなかった。

これまでの調査では、伽藍南方での遺構の発見が乏しくその利用状況があきらかではなかったが、今回検出した調査区外に延びる遺構が、その解明の糸口となることが期待される。

（森先一貴）

註

- 1) 「檜隈寺周辺の調査―第172次」『紀要 2012』。



図Ⅱ-58 第180次調査A区で検出した建物と塀（東から）